

阿弭流為と坂上田村麻呂

東北歴史博物館 相澤 秀太郎

はじめに

阿弭流為・田村麻呂を伝える文献史料

□ 『続日本紀』

□ 『日本後紀』 + 『類聚国史』『日本紀略』

※ 『日本後紀』は2/3が散逸。 ← これを『類聚国史』と『日本紀略』で補う

□ 『田邑伝記』

……10~11世紀の成立で征夷大將軍坂上田村麻呂の伝記。

古代史学における2人の位置づけ

大墓公阿弭流為 ——ひとりの蝦夷

坂上田村麻呂 ——ひとりの律令官人

- ・ この2人が出会ったのは運命
- ・ どうしてこの2人が1,300年後の今、英雄になったのか
- ・ この2人が英雄になった背景には、様々な人々との関わりと歴史的背景があった……

皆麻呂から阿弭流為へ—アテルイ前史—

藤原仲麻呂・藤原朝獺父子による東北“再”侵攻

8世紀半ば以降、陸奥国では宮城県北部へ国家が進出していくころから、蝦夷の抵抗が激しくなり、ついには大反乱へ発展していく

天平宝字3年 (759)	<small>ものう</small> 桃生城設置。石巻市（旧桃生郡河北町・桃生町）。 海道の前進基地。北上川の河口付近。北上川の船運をおさえる役割。
神護景雲元年 (767)	<small>これほり</small> 伊治城設置。栗原市（旧築館町）。 山道の前進基地。栗原郡を設置。
宝亀5年 (774)	海道の蝦夷が反乱して、桃生城を侵略して焼く。 ★774年～811年 38年戦争の始まり
宝亀11年 (780)	<small>これほりのきみあざまろ</small> 伊治公皆麻呂の反乱。 栗原地方の蝦夷の族長伊治公皆麻呂が反乱して多賀城を焼き討ち。 → 仙台平野から大崎・栗原地方の国家支配が解体。



政府は征討軍を派遣して胆沢以北の蝦夷との戦争になっていき、ここに阿弭流為が登場

皆麻呂はどこへ行ったのか？－伊治公皆麻呂の乱のその後－

①六月戊子朔。詔して曰はく。(中略)但だ彼の夷俘之性たる也。蜂のごとく屯がりて蟻のごとく聚まる。首亂階を為し、攻むれば則ち山藪に奔り逃げ、放せば則ち城塞を侵掠す。而るに伊佐西古。諸絞。八十嶋。乙代等は賊中之首にして一を以って千に当たる。
〔『続日本紀』天応元年(781)6月戊子朔条〕

→ 律令国家は、皆麻呂を追った記録はみえない。

そして残党の首領4人にも名前は現れない。もちろん阿弭流為の名も見えない。

第1章 阿弭流為

たものきみあてるとい
大墓公阿弭流為

胆沢（岩手県奥州市）地方の蝦夷の族長。胆沢における政府との戦争（789～801年）で蝦夷軍を指揮して最後の抵抗。789年（延暦8年）の戦争で勝利。

(1) 桓武朝の征夷

桓武朝の政府は、胆沢・和賀・志波の蝦夷の征討を企て、胆沢を中心として、3回にわたる大規模な征討を行い、その前に立ちふさがったのが胆沢の蝦夷族長である大墓公阿弭流為と盤具公母礼である。

第1次征討 789年 征東大將軍 紀古佐美 征軍4万人 官軍がアテルイに敗北。

第2次征討 794年 征夷大將軍 大伴弟麻呂 副將軍 坂上田村麻呂 征軍10万 官軍勝利。

第3次征討 801年 征夷大將軍 坂上田村麻呂 征軍4万 官軍勝利。アテルイ降伏

(2) アテルイの本拠地－胆沢の地とは－

② 所謂胆沢は、水陸万頃にして、蝦虜存生せり。

〔『続日本紀』延暦8年(789)7月丁巳条〕

□ 農耕集落

胆沢地方（奥州市）を含む北上川中流域では、南流する北上川に西から胆沢川・和賀川・豊里川・雫石川などの支流が流れ込む。7世紀からそれらの支流河口に農耕集落が数多く成立していた。

□ “胆沢村”とは出てこない

→ 「胆沢」は「村」としては見えないので、広域の地名とみられる。

□ 「水陸万頃」の意味

「胆沢は水陸万頃」といわれているが、これは「水田・陸田が広く作られていた」という意味で、胆沢の蝦夷が農耕蝦夷であることを示す。「頃」は田の面積の単位である。

(3) 大墓公阿弋流為 (今泉1995ほか)

阿弋流為の実態を具体的に示す史料は残されていない。そのため、古代史学の観点からは「大墓公阿弋流為」という律令国家側の史料に現れる名前の分析が行われてきた。

□2つの表記

大墓公阿弋流為 タモノキミアテ^ルイ 『続日本紀』

大墓公阿弋利為 アテ^リイ 『日本紀略』『類聚国史』→『日本後紀』

- 名に2つの表記があるが、いずれも政府側が名の音に漢字を当てたもの一字一音での表記のため、アテ^ルイの名は和語の名でなく蝦夷語に基づくとみられる。
- なぜ日本語で漢字表記ができなかったのか？

蝦夷語の意味を日本語に対応させることができなかったため、聞くままに音を漢字で当てはめたため。

[参考] 一字一音で表記された蝦夷の名前

須賀君古麻比留 (カノキミ コマヒル) / 邑良志別君宇蘇弥奈 (オラシハノキミ ウミナ)
宇漢米公宇屈波宇 (ウカンメノキミ ウカハウ) / 胆沢公阿奴志妃 (イワノキミ アヌシキ)

□ウジ名+カバネ+名

大墓=タモ:【ウジ名】+公=キミ:【カバネ】+阿弋流為=アテ^ルイ:【名】

- ウジ名とカバネは、国家の政治的制度で、天皇に隷属したしるしとして、天皇から与えられた。アテ^ルイは、本来名は持っていたが、ウジ名+カバネは持っておらず、国家に服属した際に天皇から与えられた。

□アテ^ルイは「蝦夷」

- アテ^ルイは「地名のウジ名+公」という氏姓から見て俘囚ではなく蝦夷。
※俘囚の名前は吉弥侯部が姓となる場合がほとんど。

□大墓=タモ=田茂山カ

- ウジ名の「大墓」は地名に基づき、現在北上川東岸にある「田茂山」はタモの遺存地名(旧水沢市羽田町)。史料にアテ^ルイの住居は北上川東岸にありとみえるのに一致する(今泉1995)。

←これに対して熊谷公男氏は次のように批判する(熊谷2015)

「『大墓』はタモではなくオオハカとよむべきである」

- ※蝦夷の名前のルールは「地名+公」であり例外がない。「大墓=タモ」説には田茂山という地名があるが、「大墓=オオハカ」説には、「オオハカ」という地名は確認できない。今後、議論が必要。

□「跡呂井」とアテ^ルイ

- 水沢市に「跡呂井」の地名があり、アテ^ルイの名と関係する可能性がある。通説は、アテ^ルイの名前の起源を、現在の奥州市水沢明神町一丁目に跡呂井文化センターがあることから、跡呂井を古代の遺存地名とみてアテ^ルイと結びつけている。しかし、これには反対の意見もある。その根拠が、跡呂井の一番古い史料が12世紀の「岩淵氏系図」であり、古代まで遡る証拠がないということ。

□蝦夷の名と地名

蝦夷の名が地名に一致する例もある

おんか 恩荷 (秋田の蝦夷) — おか きみ こい さ せ こ え さ し ばぐのきみもらい もたい 一男鹿 / 吉弥侯伊佐西古 — 江刺 / 盤具公母礼 — 母体

※アテルイは、はじめその蝦夷集団が国家と交渉を持ち始めた時に、国家側から、集団を代表する族長として、その居住村の名=集団の名によってアテルイと称され、次いで服属した時に、もう1つの居住村の名によって、タモ+キミというウジ名+カバネを賜った (今泉1995)。

□狭域の首長

→「胆沢公」という広域地名の胆沢をウジ名とする蝦夷がいる。これに対してアテルイはタモとアテルイという狭域地名をウジ名と名としているから、元来胆沢全体の蝦夷集団の首長ではなく、狭域の村落集団の首長であり、国家の大軍と対峙する中で、胆沢の蝦夷軍全体を指揮する軍事首長となった。

□アテルイは国家に服属していた

→ウジ・カバネを授けられているから、アテルイは一度国家に服属していた。しかし伊治公皆麻呂が郡大領となり、和人の名をもっていたのと異なり、支配機構には組み込まれず、朝貢をするゆるい服属関係。

□アテルイはアイヌ語地名(今泉1995)

→青森・岩手・秋田3県には北海道と同じくらいアイヌ語地名が分布していて、この地域の蝦夷はアイヌ語系の言語を話していた。

→アテルイ = 「アツ・ウォロ・イ」 = 「楡皮を・ひたす・処」の意味。楡皮・オヒョウはアイヌが繊維原料に用い、柔らかくするために水にひたす。

→モライ = 「砂でふさがる・川」あるいは「静かな・川」の意味。

第2章 坂上田村麻呂—阿弼流為との出会いまで—

(1) 坂上氏—田村麻呂の“家”

③大納言坂上大宿祢田邑麻呂は、前漢高祖皇帝廿八代より出でたり。後漢光武皇帝十九代孫孝靈皇帝十三代に至りて、阿智王、一県同姓百人を率いて漢朝より出でて本朝に入る。応神天皇二十六年なり。(後略) (『田邑伝記』)

④正四位下近衛員外中將兼安藝守勳二等坂上大忌寸菟田麻呂等言さく。桧前忌寸をもって大和國高市郡司に任ずる元の由は、先祖阿智使主、輕嶋豐明宮馭宇天皇(註—応神天皇)の御世に十七縣の人夫を率いて帰化せり。(後略)

(『続日本紀』宝龜三年(七七二)四月庚午条)

⑤右衛士督從三位兼下總守坂上大忌寸菟田麻呂等、上表して言す。臣等、本は是れ後漢靈帝の曾孫、阿智王の後なり。(『続日本紀』延暦四年(七八五)六月癸酉条)

□坂上氏：もともと渡来系の有力氏族である倭漢(やまとのあや)氏の一枝族。

壬申の乱後、倭漢氏は文・民・坂上・内蔵・大蔵など多くの氏族に分裂。

⑥家、世々武を尚(たつと)、鷹を整へ馬を相(み)る。子孫業(わざ)を伝へ、相次ぎて絶えず。(『日本後紀』弘仁2年(811)5月丙辰条・田村麻呂薨伝)

→坂上氏が代々“武”をもって朝廷に仕えてきたことが述べられている。

父・坂上莉田麻呂

藤原仲麻呂の乱で、牡鹿嶋足とともに、仲麻呂の息子である訓儒麻呂（くずまろ）を射殺。このほか、自己の武勲によってさらに昇進を重ねる。

(2) 田村麻呂の誕生

□田村麻呂の誕生 天平宝字2年（758）生まれ。父・莉田麻呂は31歳

□官僚としての「出身」（＝就職）

官歴の初見：23歳 近衛府 近衛将監（宝亀10年（779））（『田邑伝記』）

← 蔭位の制により、21歳で7位の武官として朝廷に出仕。

2年後に近衛将監に任じられたのだろう（熊谷2015）

その後の出世コース

延暦 6年（787）8月 近衛少将
延暦18年（799）5月 近衛権中将
延暦20年（801）12月 近衛中将
大同元年（806）4月 中衛大将
： （中衛府が右近衛府に改組）
大同2年（807）4月 右近衛大将

→ 田村麻呂の中央での出世はエリート武官そのもの

近衛府とは

……天皇に近侍する護衛。天皇の“親衛隊”。ここに田村麻呂が関わった意義とは…

なぜ田村麻呂は桓武天皇のもとで近衛府官僚として出世していったのか

- ・ 武官氏族「坂上氏」の氏族的伝統+天皇からの信頼
- ・ 「田村麻呂の武官としての官歴が（略）父莉田麻呂のそれをもしのぎ、しかも一貫して近衛府畑を歩んでいったことを考えると、やはり田村麻呂本人の武人としての優れた才能を過小評価するわけにはいかない」（熊谷2015）

⑦目は蒼鷹（そうよう※1）の眸（ひとみ）を写し、鬢（びん）は黄色の縷（る）を繫ぐ。怒りて眼を廻らせば、猛獸も忽ち斃（たお）れ、咲ひて眉を舒（ゆる）めれば、稚子もすみやかに懐く。※1 蒼鷹…青白い羽の色をした鷹。しらたか（『田邑伝記』）

(3) 延暦8年（789）の戦い—阿弓流為の戦略・征討軍の惨敗—

□延暦8年の征夷に向けた準備は、長岡京の造営が一段落した延暦5年（786）に開始。

□延暦7年（788）に本格化。

3月2日 来年の征夷のために陸奥国に命じて軍糧35,000余斛を多賀城へ。

3月3日 東海・東山・坂東諸国に勅を下して、歩兵・騎兵52,800人余りを徴発して来年3月までに多賀城に集結するよう命じる。

3月21日 征東使の任命。

⑧征東將軍（紀古佐美）奏すらく（略）「三軍，謀（はかりごと）を同じくし力を并（あ）せて，河を渡りて賊を討たむ」。約（ちぎ）れる期（とき），既に畢わる。是によりて，中軍・後軍各二千人を抽出（ぬきいだ）して同じく共に凌ぎ渡る。賊帥夷阿弋流為が居に至る此（ころおい），賊徒三百許人（三百人ばかり）有りて迎え逢ひて相戦ふ。官軍の勢い強くして賊衆引き遁（に）ぐ。官軍且つは戦ひ，且つは焼きて，巢伏村に至るとき，前軍と勢を合わせむとす。

而れども，前軍，賊の為に拒（はば）まれて進み渡ることを得ず。ここに賊衆八百許人（八百人ばかり），更に来たりて拒ぎ戦ふ。その力，太（はなは）だ強くして，官軍稍（やや）く退くとき，賊と直ちに衝（つき）けり。更に賊四百許人有りて，東山より出でて官軍のうしろを絶てり。前後に敵を受けたり。賊衆奮い撃ちて，官軍排されり。（略）

忽（すべ）て，賊の居を焼き亡ぼせるは十四村，宅八百許烟なり。器械・雑物は別の如し。官軍の戦死せる人二十五人，矢に中れる人二百四十五人，河にいりて溺れ死ぬる人一千三十六人，裸身にして遊び来たる人一千二百五十七人。別将出雲諸上・道嶋御楯ら餘衆をひきて還り来たり」ともうす。

（『続日本紀』延暦8年（789）6月甲戌条）

内容 賊帥（敵の大將）阿弋流為の居所に至る頃，賊徒300人ばかりが官軍を迎え撃ち，合戦となりました。官軍の勢いが強く，賊衆は退却しました。官軍は賊衆と戦いながら，村々を焼き払いながら進軍し，巢伏村に至ったとき，前軍と合流しようとした。ところが，前軍は賊のために阻まれて，河（北上川）を進み渡ることができませんでした。そこへさらに賊衆800人ばかりが来襲し，官軍の行く手を遮りました。その勢力は非常に強く，官軍が少し退いたときに，賊衆はただちに襲いかかってきました。さらに賊400人ばかりが東の山から現れ，官軍のうしろを遮断し，官軍は前後から敵の攻撃を受けました。（略）（戦果と被害を）総計すると，焼亡させた賊の集落は14ヶ村，宅800戸ほどで，押収した様々なものについては別紙の通りです。官軍で戦死したものは25人，矢に当たって負傷したものが245人，河に飛び込んで溺死したものが1,036人，裸身で泳いだものが1,257人です。別将の出雲諸上・道嶋御楯らが残った衆を率いて帰還しました。

⑨是に征東將軍に勅していはく「比来（このごろ）の奏を省みるに云はく「胆沢の賊はすべて河の東に集へり。先ずこの地を征して後に深く入ることを謀らむ」といえへり。然るときは軍監以上，兵を率ひてその形勢を張り，その威容を厳しくして，前後相續きて以て簿（せ）め伐つべし。而れども，軍少なく，将，卑しくして還りて敗績を致せるは，是れ則ちその道の副将らが計策の失（あやま）れる所なり。

（『続日本紀』延暦8年（789）6月甲戌条）

内容（桓武天皇から征夷將軍への勅）征東將軍らは，以前の奏状で「胆沢の賊はすべて河の東に集結しています。まずこの地を征して，後に深く攻め入ろうと考えております」と述べたではないか。それならば軍監以上の償還が兵を率いて形勢を整え，そ

の威容を厳格にして、前後相續いて攻め伐つべきである。しかし、河の東に派遣した軍は少なく、指揮官も地位が低く、かえって大敗を喫することになった。これはその方面の副将らの計略が誤っていたからである。

→ 桓武天皇は、今回の戦いを征夷軍の大敗と断じた上で、地位の低い指揮官を派遣した副将らの責任を厳しく叱責。

征討軍	征東大將軍紀古佐美 ^{きのこさみ} （参議），軍隊39,910人＝征軍27,470+輜重 ^{しちよう} 12,440人。 786年8月から征東のための準備開始（軍士の徴発，物資の調達） 軍は52,800人徴発の予定。当初，胆沢から和賀・志波を征討する計画。
戦闘	延暦8年（789） 3月9日 征討軍が多賀城から胆沢へ出発。 3月28日征討軍が北上川西岸の衣川を渡ったところに軍營3所を設け駐屯 6月3日 会戦。征討軍4,000人 VS 蝦夷軍 1,500人

行軍

- ① 征討軍が胆沢に進軍。前・中・後軍 の3軍編成。中・後軍合計4,000人が 北上川西岸から東岸へ渡河。前軍は 西岸を北進。
- ② 中・後軍はアテルイの住居付近で、 蝦夷軍300人と出会い戦闘。蝦夷が 退くのを追って征討軍が蝦夷の村を 焼きながら進む。
- ③ 巢伏村^{すぶせ}で西岸の前軍が渡河し、中・ 後軍と合体する計画であったが、前 軍は蝦夷軍に遮られ渡河できず。
- ④ 東岸に孤立した中・後軍は北からの 蝦夷軍800人に押されて退き、さら に東の山から出てきた蝦夷軍400人 に後方を阻まれて挟撃されて壊滅し、 北上川に逃げこむ。

蝦夷軍の勝利

北上川西岸を進んできた征討軍に対して、蝦夷軍は東岸に軍を集めて待った。

征討軍は27,000人余の軍をもちながら、水量の多い北上川を前にして、4,000人の軍しか送れず、蝦夷軍は山の迫った狭い東岸に征討軍を誘い込み、挟み撃ちにして破った。

蝦夷軍勝利の要因 — 狭い東岸におびき出したこと

- 征討軍の大軍に対して、戦場を平野の広がる西岸でなく、山の迫る狭い東岸として、大軍の展開を許さなかった。
- 27,000人の大軍の征討軍に対して、北上川を障壁として戦闘参加者を4,000人に減らさせた。

戦果と損害

□ 征討軍の戦果 斬獲首89人，蝦夷村焼亡 14村800家，兵器・軍資の捕獲

□ 損害

- 「戦死」25人，「矢に当たる者」245人
- 「溺死」1,036人
- 「兵器」を捨て逃げ帰った者1,257人

「死亡」1,000有余人，傷害約2,000人



大將軍紀古佐美は“勝利した”と強弁して報告したが，桓武天皇に叱責される。

→ この蝦夷軍の大勝が，のちの阿弼流為らの運命を決めることになる。

第3章 阿弼流為と坂上田村麻呂の戦い

(1) 延暦13年(794)の征討

政府はこの後さらに大軍を催し，794年第2次，801年第3次の征討を行って勝利する。

この2回の戦争は坂上田村麻呂が指揮した。アテルイは蝦夷軍を指揮してこれに対抗したが，史料の欠損によって詳しいことはわからない。

⑩甲寅(略) 副将軍坂上大宿禰田村麿已下，蝦夷を征す

(『日本紀略』延暦13年6月甲寅条)

⑪丁卯。征夷大將軍大伴弟麿奏すらく，首四百五十七級を斬り，虜百五十人を捕らえり。馬八十五疋を獲り，落七十五処を焼く。

(『日本紀略』延暦13年(794)10月丁卯(28日)条)

⑫戊戌。征夷大將軍大伴弟麿朝見して，節刀をたてまつる。

(『日本紀略』延暦14年(795)正月戊戌条)

□ 延暦13年の征夷の経緯

延暦10年(791)正月 東海道・東山道の関兵

同 7月 征東使任命(坂上田村麻呂を含む大使以下4名)

同 11月 坂東諸国に糒(ほしいい)12万余斛の準備を命じる

延暦11年(792)閏11月28日 征東大使 大伴弟麻呂辞見

延暦13年(794)正月1日 征東大使 大伴弟麻呂辞見

延暦13年(794)6月13日 「副将軍坂上大宿禰田村麿已下，蝦夷を征す」

→ 『日本紀略』の記事はいたって簡単なもので『日本後紀』に有ったはずの具体的な内容はすべて省略されている。しかし，征夷大將軍ではなく副将軍以下が蝦夷を征討したこと，副将軍4人のなかでも最年少の坂上田村麻呂が主導的な役割を果たしたことが知られ，田村麻呂は武人としての才能を遺憾なく発揮したとみられる。

(2) 延暦13年の戦いの政治的意図—桓武天皇の企てとは?—

なぜ延暦13年(794)に征夷を実行したのか?

794年といえば……「鳴くよ うぐいす 平安京」→平安京遷都

どうして遷都の準備で忙しいなかで征夷を実行したのか?

＝ 遷都と征夷が同じ年に実行されたのは，単なる偶然ではない!

①辞見が2度も!? -このことをどう考えればいいのか?

「ところが奇妙なことに大伴弟麻呂は延暦13年（794）の元旦に節刀を賜り、再び陸奥に出発しているのである。坂上田村麻呂によって第二次征討が実施されたのはこの年の6月である。延暦11年閏11月以降に何らかの理由で征夷が延期され、大伴弟麻呂は一旦帰京して、延暦13年の元旦に再び出発したと考えざるを得ない」（鈴木2008）

②なぜ延期したのか?

征夷と造都を組み合わせて行う

「征夷と同時に戦勝報告が新京にもたらされれば、二度目の遷都を劇的に演出することができ、それを行った天皇の権威を飛躍的に高めることができる」（鈴木2008）

□平安遷都の詔

→ ①征夷将軍からの戦勝報告 ②神階の授与と官人への授位・任官 ③遷都の詔の順

⑬-①征夷将軍大伴弟麻呂奏すらく「首四五七級を斬り、虜百五十人を捕らえ、馬八十五疋を獲、落（村落-引用者注）七十五処を焼く」と。

⑬-②鴨・松尾の紙に階（位階-引用者注）を加ふ。郡（都の誤記か-引用者注）に近きを以てなり。授位・任官。

⑬-③遷都の詔に曰く「云々。葛野（かどの）の大宮の地は、山川も麗しく、四方の国の百姓も参り出で来る事も便にして、云々」と。

（『日本紀略』（794）十月丁卯条）

(3) 延暦20年（801）の戦い

□延暦20年の征夷の経緯

延暦16年（797）11月5日 将官の任命 「征夷大將軍 坂上田村麻呂」

※延暦15年正月 田村麻呂は陸奥按察使兼陸奥守

同年10月 鎮守将軍

→この時点で、田村麻呂は東北の軍事・行政の最高責任者となる

延暦20年（801）2月14日 「節刀を賜う」 *征夷軍40,000人 （史料⑭）



この間に蝦夷を征討

同 9月27日 戦勝報告 （史料⑮）

同 10月28日 入京し、節刀を返上

□延暦20年の征夷の意義

延暦20年の征夷については、史料の欠落もあり具体的なことはわからない。

ただし、この征夷によって、胆沢（現：奥州市）から志波（現：盛岡市）にかけての蝦夷を完全に制圧したことは間違いないと思われる。その根拠が、次の年から開始される胆沢城・志波城の造営である。

延暦21年（802）正月9日 田村麻呂を「造胆沢城使」として陸奥国に派遣。（史料⑯）

→胆沢城を造営（現：岩手県奥州市水沢）。

延暦21年（802）7月10日 田村麻呂とともに入京。阿弼流為が降伏。（史料⑰⑱）

延暦21年（802）8月13日 夷の大墓公阿弼流為と盤具公母礼の処刑。（史料⑲）

延暦22年（803）3月6日 「造志波城使」坂上田村麻呂辞見す。陸奥国へ。（史料⑳）

→志波城を造営（現：岩手県盛岡市）

⑭丙午。征夷大將軍坂上田村麿に節刀を賜う。

（『日本紀略』延暦20年（801）2月丙午条）

⑮丙戌。征夷大將軍坂上田村麿等もうす。臣聞く。云々。夷賊を討ち伏せりと。

（『日本紀略』延暦20年（801）9月丙戌条）

⑯丙寅。従三位坂上大宿禰田村麿を遣して、陸奥国胆沢城を造る。

（『日本紀略』延暦21年（802）正月丙寅条）

⑰庚子。造陸奥国胆沢城使陸奥出羽按察使従三位坂上大宿禰田村麻呂等言さく「夷大墓公阿弼利為、盤具公母礼等、種類五百余人を率いて降りり」

（『類聚国史』延暦21年（802）4月庚子条）

⑱甲子。造陸奥国胆沢城使田村麿来たれり。夷大墓公二人並びに従う。

（『日本紀略』延暦21年（802）7月甲子条）

⑲丁酉。夷大墓公阿弼利為、盤具公母礼らを斬る。この二虜は並びに奥地の賊首なり。二虜を斬る時、將軍ら申して云はく「この度は願いに任せて返し入れ、その賊類を招かむ」と。

しかれども、公卿執論して云はく「野性の獣心は反覆定まることなし。たまたま朝威に縁りてこの梟帥を獲たり。もし申請に依りて奥地に放還すれば、所謂虎を養ひて患を遺すなり」と。即ち両虜を河内国杜山で斬る。

（『日本紀略』延暦21年（802）8月丁酉条）

⑳丁巳。（中略）是日、造志波城使従三位行近衛中将坂上田村麿辞見す。（後略）

（『日本紀略』延暦22年（803）3月丁巳条）

降伏から入京へ

第3次戦争の敗戦後、802年4月アテルイと盤具公母礼は500人を率いて、坂上田村麻呂に降伏し、7月に2人は田村麻呂に従って平安京に入った。

→なぜアテルイは降伏したのか？

- ・長い戦闘による胆沢蝦夷集団の疲弊。
- ・連携していた有力蝦夷集団わがのきみ和賀公氏、江刺の胆沢公氏などの戦線離脱による孤立化。
- ・802年1月から胆沢支配の拠点としての胆沢城の造営開始と移民（4000人）。

入京の意味

アテルイ・モライの入京は、征討の戦果としての俘虜の進上の意味を持ち、7月に朝堂院で行った戦勝祝賀の儀式に2人は引き出された。それは蝦夷平定の戦果を官人たち

に誇示するため。

助命と死刑

「このたびは、2人の願いに任せて故郷に返し、蝦夷の残党を招き寄せたい」と述べて2人の助命を求めた。しかしこの主張は「野性の獣の心は、いつ背くかわからない。たまたま朝廷の威光によってこの族長をとらえたのだ。もし申請の通り奥地に放還すれば虎を養って患いを遺すようなものだ」

→公卿たちの意見によって否定され、8月13日、2人は処刑された。

※2人の処置について、田村麻呂は彼らを今後の蝦夷経営において未服属の蝦夷を懐柔して帰服される仲介者として利用するために、助命して郷里に返すことを請願したが、政府中枢部の公卿らは、彼らを帰郷させるのは「虎を養い患^{わずらい}を遺す」ようなものであるとして死刑に処することに決定し、802年8月アテルイ・モライは河内国植山（処刑地は不明）で斬首刑に処された。

死刑の場所

①大辟〔だいびやく〕罪（＝死刑）を執行する場合は、みな市で行うこと。（略）
七位以上及び婦人は、犯した罪が斬でなければ、人目につかない処で絞首すること
（『令義解』獄令大辟罪条）

→律令では、死刑は見せしめのために人の集まる市で行うが、7位以上の官人や婦人の絞首刑は、優遇処置として人の見ていない「隠処」（広野など）で行うことが定められる。

→アテルイとモライの死刑はこの優遇処置の「隠処」における死刑であるが、極刑の斬首であった。

服属した蝦夷の死刑は珍しい

反乱した蝦夷は捕まらないことが多いが、帰降した者は許されるのが普通であり、アテルイ・モライが斬首刑に処せられたのは異例である。これは、胆沢の蝦夷の平定が3次10数年わたる困難な事業で、特に延暦8年には大敗を喫し、アテルイ・モライがその中心人物であり、公卿らが2人に恐れと憎しみを抱いていたことの現れ。

田村麻呂はなぜ助命嘆願をしたのか？

アテルイ・モライが捕まった後、征夷大將軍の坂上田村麻呂は政府に2人の助命嘆願をするが、それは、今後の蝦夷経営において、彼らを敵対する蝦夷を懐柔して帰服させる仲介者として利用価値が高いと考えたからである。

12年に及ぶ律令国家の攻撃に耐え抜いた阿弭流為—その背景には……—

蝦夷の社会はまだ国家形成に到らない部族同盟の段階であり、この政府軍と蝦夷軍の戦いは、結局、国家と部族同盟の戦いであり、兵数の差に示されるように両者の間には大きな格差があった。

それでありながら、蝦夷軍が大規模な3次12年の戦いに耐えることができた要因には、

- ①農耕社会であることによる生産力の高さ
 - ②地の利
 - ③胆沢の蝦夷の部族同盟、後方の蝦夷集団との連携の形成
- が考えられる。

第4章 その後の田村麻呂

清水寺の造営

清水寺縁起によれば、宝亀9年（778）に大和の子島寺の僧侶・賢心が音場の滝で行畷なる僧からこの地を譲られたのに始まる。その後、坂上田村麻呂が妻・三善高子と堂舎を建立し、延暦24年（805）に桓武天皇が寺地を施入した（『日本歴史大事典』「清水寺」）

② 寺地を田邑将軍に賜う官符

太政官符 山城国司

清水山寺 愛宕郡に在り

四至 東は高峯を限る

西は公地を限る

南は辰振谷を限る

北は大道を限る

右、右大臣宣すらく、勅を奉るに、「件の寺地は、宜しく参議従三位坂上大宿祢田村麻呂に賜うべし」てへり。国、宜しく承知し、件によりて行ふべし。符到らば奉行せよ。
（後略） 延暦廿四年十月十九日 （田邑伝記）

③今ハ昔、大和国高市ノ郡、八多ノ郷ニ小島山寺トイフ寺アリ。其ノ寺ニ僧有リケリ。名ヲ賢心ト云フ。報恩大師ト云ヒケル人ノ弟子也。（中略）

大納言、坂上ノ田村麻呂ト云フ人、近衛ノ将監ト有ケル時、都ヲ造ル使トシテ、右京ノ人ヲ貫ナリテ、居所ヲ新京ノ西ニ給ハル。奉公ノ隙、京ヲ出テ、東ノ山ニ行テ、妻ノ産セル料ニ一ノ鹿ヲ求得テ其ヲ屠ル間、田村麻呂、奇異ノ水ノ流出タルヲ見ル。将監、自ラ、其水ヲ飲ムニ、身冷クシテ樂キ心有リ。是ニ依テ、「此ノ水ノ源ヲ尋ム」ト思テ、水ニ付テ行クニ、瀧ノ下ニ至ヌ。将監、暫ク徘徊間ニ、鬚ニ経ヲ誦スル音ヲ聞ク。是ヲ聞クニ、懺悔ノ心出来テ、亦、経ノ音ヲ尋テ行クニ、遂ニ賢心ニ會ヌ。将監、問テ云ク、「我レ、汝ガ躰ヲ見ルニ、只人ニ非ズ。是、神仙ナメリ。誰ガ末葉ナルゾ」ト。賢心、荅テ云ク、「我ハ是、小嶋□ 恩ノ弟子也」。此山ニ来リシ事ノ有様ヲ具ニ荅フ。先ヅ夢ニ見シ事、□水ノ流事、次ニ翁ノ譲リシ事、形ヲ隠シニシ事、寺ヲ起テ観音ヲ可造居奉キ事、東ノ峯ニシテ翁ノ履ヲ見付タシ事、皆、具ニ語ル。将監、此事共ヲ委ク聞テ、返ラム事ヲ忘タリト云ヘドモ、賢ニ永キ契ヲ成シテ語テ云ク、「我レ、志ヲ勵シテ彼願ヲ可遂シ。汝ガ年来ノ有様ヲ聞クニ、實ニ佛ノ如クニ可貴シ」ト。賢心、喜テ、菴室ノ内ニ返入ヌ。将監、返々ス、契深ク成シテ礼拜シテ、新京ノ

家ニ返ヌ。

妻、三善ノ高子ノ命婦ト云ツ。将監、返テ、妻ニ、鹿ヲ殺ス間、山ノ中ニシテ賢心ニ會タリツル事ヲ、具ニ語ル。妻荅テ云ク、「我レ、病ヲ愈サムガ為ニ生命ヲ殺シツ。後ノ世ノ事、更ニ難謝シ。願クハ、其罪ヲ被免ムガ為ニ、我が家ヲ以テ彼堂ヲ造テ、女身ノ无量キ罪ヲ懺悔セムト思フ」ト。将監、是ヲ聞テ、喜テ、白壁ノ天皇ニ、賢心ガ有様ヲ申テ、度者一人ヲ給リテ、度スル事ヲ令得テ、名ヲ延鎮ト改メツ。其年ノ四月十三日ニ、東大寺ノ戒壇院ニシテ具足戒ヲ受ツ。其時ニ、延鎮、将監ト同心ニシテ、カヲ合セテ、彼所ニ岸ヲ壊チ谷填テ、伽藍ヲ始テ建ツ。高子ノ命婦ハ、女官ヲ雇ヒ、諸ノ上中下ノ人ヲ勸メテ、其カヲ命加メテ金色ノ八尺ノ十一面四千手ノ観音ノ像ヲ造奉ル。未ダ不造畢ルニ、靈驗、甚ダ多シ。何况ヤ、供養ノ後ハ、世擧テ崇メ奉ル事无限シ、此寺ニ参リ合ヘル事、風ニ随ヘル草ノ如シ。時、世ノ末ニ臨ト云ヘドモ、人、願ヒ求ル事有テ、此観音ニ心ヲ至シテ祈リ申スニ、靈驗ヲ不施給ト云フ事无シ。然レバ、于今、都□ノ上中下ノ人、皆、首ヲ低テ歩ヲ不運ト云フ事无シ。

今ノ清水寺ト云フ、是也。田村ノ将□ノ建タル寺也トナム語り傳ヘタルトヤ。

(『今昔物語集』卷第十一「田村將軍始めて清水寺を建てること第三十二」)

②現代語訳 今は昔、大和国高市郡八多郷に小島山寺という寺がある。その寺に賢心という名の僧がいた。報恩大師という人の弟子にあたる。(中略)

その頃、大納言坂上田村麻呂という人が近衛将監の任にあり、新都造営の長官を仰せつけられ、右京の住人となって、居所を新しい都の西の地区に賜った。公務の暇に京を出て東の山に行き、産後の妻に食べさせるために一匹の鹿を捕らえ、それを切り裂いているとき、田村麻呂は不思議な水の流れがあることに気がついた。自分でその水を飲んでみると、体じゅうが爽やかになり心も楽しくなってきた。そこで「この水源を見つけよう」と思い、流れにそって歩いて行くと、やがて滝の下に出た。将監がしばらくあたりを歩き回っていると、やがて滝の下に出た。将監がしばらくあたりを歩き回っていると、ほのかに誦經の思いがわいてきたので、また經の声を尋ね求めて進んでいくと、ついに賢心に出会った。将監が「そなたの姿を見ると普通の人には見えない。きっと仙人であろう。誰の子孫ですか」と聞いた。

賢心は「私は小島恩大師の弟子です」と言っ、この山にやってきたことの次第を詳しく答えた。まず夢に見たこと、□水が流れていたこと、次に翁が依嘱したこと、姿を隠してしまったこと、寺を建てて観音を造って安置しもうすべきこと、東の峯で翁の履き物を見つけたことなど、これらを具体的に語った。将監は事の子細を聞きながら帰ることも忘れていたが、この賢心と末永い親交を約束して「私は心を励ましてその願いを果たそうと思います。そなたの長年のご様子を聞くと、まことに仏のように尊い思いがします」と賢心に言った。賢心は喜んで庵室の内に帰って行った。将監は返すがえす深いちぎりを約束し、礼拝して新京の家に戻った。

彼の妻は三善高子(みよしのたかいこ)の命婦といった。将監は帰ってからその妻に、鹿を殺したこと、山の中で賢心に出会ったことの次第を詳しく語った。妻は「私は自分の病を治そうとして命あるものを殺してしまいました。死後の罪はどうにも償いようがありません。なにとぞその罪を免れるために、この家で以てそのお堂を建てて、女の身のはか

りしれない罪を懺悔私用と思います」と言った。これを聞いた将監は喜んで、白壁天皇（光仁天皇）に賢心の有様を申し上げ、得度の僧ひとり賜り、賢心を得度させて名を延鎮と改めた。そしてその年の4月13日、東大寺の戒壇院において具足戒を受けた。

そこで延鎮と将監は心をひとつにして、力を合わせてその地の崖を崩し、谷を埋めてそこに寺院を創建した。高子の命婦は女官を集め、上中下の人々を勧めて協力して金色の八尺の十一面四千手観音像を造って奉った。まだ造り終わらぬうちから非常に多くの靈驗をお示しになった。まして供養の後は、世の中のひと、ことごとくにこのうえなく尊崇しようしあげ、この寺にお参りに来るさまは、風になびく草のようである。時あたかも末世に臨んではいるが、人になにか願い求めることがあって、この観音に心を込めてお祈り申し上げたなら、靈驗を施しなさらぬということはない。それゆえ、今も都の□上中下の人々で、頭を垂れてこの寺に足を運ばぬ物は誰一人としていない。

今の清水寺というのはこの寺である。田村將軍の建立した寺である、と語り伝えられていると言うことである。

最晩年の田村麻呂 “おじいちゃんの顔一孫があまりにもかわいすぎて……”

②④夏四月己酉。(略) かつて嵯峨天皇、豊樂院に御して以って射礼を觀る。(略) (葛井) 親王は時に年十二。天皇戯れ語りて親王に日はく。弟、少弱と雖も。弓矢を執るべし。親王詔に応じて起つ。再び發すれば再びあたり。時に外祖父、(坂上) 田村麻呂亦た侍して坐ず。驚動して喜び躍れり。自己能わず。即り便に起座し、親王を抱きて舞う。進みて日はく。臣はかつて數十萬之衆をもつて東夷を征討せり。實に天威に頼りて向かう所敵なし。自ら料るに、勇略・兵術は多く極めざるところなり。今親王年、齟齬にあれども武伎は此くのごとし。愚臣及ぶところにあたわず。天皇大いに咲ひて日はく。將軍、外孫を褒め揚げる事。何と甚だ過ぐる事多し。

(『日本文徳天皇実録』嘉祥三年(850)4月己酉条)

現代語訳 田村麻呂の最晩年にあたる弘仁2年(811)正月17日のこと。内裏の豊樂院では嵯峨天皇出後のもと、年中行事である射礼が行われた。恒例の行事が終了した後に、親王や官人たちが入れ替わり立ち替わり弓を射てその腕前を競った。そのとき、田村麻呂の孫である12歳の葛井(ふじい)親王にたいして嵯峨天皇は「親王はまだ幼いけれども、弓矢を執ってみてはどうだ」というと、親王は即座に立ち上がり、2回射て2回とも的を射貫くことができた。これを見ていた祖父の田村麻呂は思わず座から飛び上がって喜び、親王の元に駆け寄って抱き上げ、嵯峨天皇の前に進み出て「臣(=田村麻呂)はかつて数十萬の軍勢を率いて東夷を征伐しましたが、天皇のご威光のおかげで向かうところ敵なしでした。ですが、まだまだ兵法を極めたとは申せません。ところが、この親王はまだ年端もゆかないのに大した腕前でいらっしゃる。とても臣の及ぶところではございません」と申し上げた。すると嵯峨天皇は大笑いして「將軍、それはいくら何でも外孫をほめすぎではないかな」とたしなめたという。

田村麻呂薨去

弘仁2年（811）5月23日 粟田別業にて死去。享年54。

㊤大納言正三位兼右近衛大将兵部卿坂上大宿禰田村麻呂薨ず。

（『日本後紀』弘仁2年（811）5月丙辰条）

田村麻呂の薨伝

㊤田村麻呂，赤面黄鬚にして，勇力人に過ぎ，将帥の量（ちから）あり。帝（桓武天皇）これを壮（さかん）とす。（略）頻りに辺兵を率いて出づる毎に功あり。寛容にして士を待ち，能く死力を得たり。（『日本後紀』弘仁2年（811）5月丙辰条）

→ 武将としての能力や数々の武勲を褒めたたえるばかりでなく，寛容な性格で人望もあつたことを述べる。

おわりに

田村麻呂の墓

㊤戊寅。山城国宇治郡地三町を賜ひて，故大納言贈従二位坂上大宿禰田村麻呂の墓地となす。（『日本後紀』弘仁二（811）年十月戊寅条）

㊤本願將軍に墓地を賜ひし官符 山城国宇治郡七条咋田里栗栖村に在り

太政官符 民部省

四至 東は六七条の間 畔井公田を限る

西と南は大路を限る

北は白馬背坂上橋之峯を限る （中略）

右，右大臣の宣を被るに倂はく，「勅を奉るに，件の地は宜しく永く故大納言贈従二位坂上大宿禰田村麻呂墓地となすべし。」（後略）弘仁二年十月十七日（『田邑伝記』）

田村麻呂の墓が明らかに—2007年6月—

【西野山古墓（にしのやま こぼ）】京都府京都市山科区西野山岩ヶ谷町

大正8年（1919）に発見。最近の研究で弘仁2年（811）に死去した坂上田村麻呂の墓であることが明らかにされた。西野山古墓は，東に山科盆地を望む山の斜面に墓抗を掘り，木棺の周囲を木炭で分厚く覆い，その上に低い墳丘が築かれていた。この墓からは，副葬品として金装太刀一口，革帯飾石一括，金銀平脱双鳳文鏡（キンギンヘイダ ツツウホウモンキョウ）一面，刀子一口，鉄鍬十数本，鉄板二枚，瓦硯一面，陶製水滴一口が出土しており，いずれも国宝に指定されている。

西野山古墓の被葬者は，8～9世紀初頭に死去した公卿クラスの上級貴族であり，武官

であったと考えられる。『田邑伝記』『清水寺縁起』に記される位置や年代、内容のどれをとっても坂上田村麻呂と矛盾しない。2007年6月、京都大学の吉川真司准教授の分析により、田村麻呂の墓であることが確実視された。

なぜ阿弭流為は英雄視されるのか

服属した蝦夷のなかで、

唯一処刑された悲劇の蝦夷“阿弭流為”

→ 田村麻呂が助命嘆願 → “願いが受け入れられず処刑” = ここにドラマがあった

田村麻呂の阿弭流為に対する思い

田村麻呂の阿弭流為に対する強い思い

……ともにこれからの東北の地を治めていきたいという、強い思いがあったのかも
しれない。

現代に生き続ける阿弭流為—逆賊から英雄へ—

□長編アニメーション

「アテルイ—その瞳は未来をみていた—」

□NHK BS時代劇

「火炎・北の英雄 アテルイ伝」(2013年)

□地域の英雄として—

延暦8年の会

アテルイを顕彰する会

□みなさんは、どのようなアテルイ像を描きますか？

主要参考文献

高橋 崇 1986『坂上田村麻呂』[新装版] (吉川弘文館)

今泉隆雄 1995「三人の蝦夷—阿弭流為と皆麻呂・真麻呂—」

(同『古代国家の東北辺境支配』吉川弘文館, 2015年に収録)

鈴木拓也 2008『蝦夷と東北戦争<戦争の日本史③>』(吉川弘文館)

樋口知志 2013『阿弭流為—夷俘と号すること莫かるべし—』(ミネルヴァ書房)

熊谷公男 2015「坂上田村麻呂」(吉川真司編『古代の人物④平安の新京』清文堂出版)

鈴木拓也編2016『三十八年戦争と蝦夷政策の転換<東北の古代史④>』(吉川弘文館)

熊谷公男編2016『アテルイと東北古代史』(高志書院)